

神勝禅寺 秀路軒

茶室「秀路軒」は神勝寺に見られる新旧建造物の融合の完璧な一例です。茶室設計の専門家中村昌生氏設計の秀路軒は、1788 年の火事で焼失した残月亭の応接用座敷と不審菴の茶室を細部まで復元したものです。中村氏は古い図面と説明書きに基づいて両方の建物の構造を秀路軒に忠実に再現しています。

残月亭と不審菴はどちらも日本の茶道の流派表千家有数の茶室で、茶の湯の宗匠千利休（1522-1591）と深いかわりがありました。秀路軒に再現されているように不審菴は、抑えた色調と質素で飾り気のない造りによって訪れる人に静けさと平穏な気持ちをもたらす草庵風の茶室でした。残月亭はそれ自体、利休が大名豊臣秀吉（1537-1598）をお茶でもてなした利休邸の応接用座敷「色付九間書院」を再現したものでした。

豊臣秀吉の影響は長い歴史を経て秀路軒の一角にある小さな上段の造りに受け継がれています。利休邸の応接用座敷の上段は秀路軒のものよりさらに小ぶりでしたが、ここに座った秀吉が小さすぎると不満を述べたため利休はその大きさを拡張し二畳分としました。秀路軒にはこの新しい造りが取り入れられています。

秀路軒は一般公開されており、抹茶を味わうことができます。